

聖書：マタイ 26：69～27：10

説教題：ペテロとユダ

日時：2020年9月6日（朝拝）

1回の説教で章をまたぐ箇所を取り上げるのはそう多くないと思いますが、今日はそうさせていただきます。ここには特に二人の人の記事が出て来ます。説教題にもしました通り、ペテロとユダの二人です。この二人の記事を一緒に見ることによって、私の生き方はどうなのか、また私はどの道に行くべきなのか、大切なことを学ぶことができるように思います。順番にまずペテロについての記事から見て行きたいと思います。

彼はここでイエス様を3回に亘って否認します。このことはすでにイエス様から予告されていました。この章34節でイエス様はこう言っておられました。「まことに、あなたに言います。あなたは今夜、鶏が鳴く前に三度わたしを知らないと言います。」これに対してペテロは自分は決してそんなことはしないと力を込めて否定しました。33節：「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。」35節：「たとえ、あなたと一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」ところがわずか数時間後に、ペテロは自分が否定したまさにそのことをここでやってしまうのです。

イエス様が捕らえられ、大祭司カヤパのところへ連れて行かれた後、ペテロもそこにいたことが前回の58節で短く触れられていました。つまり彼はそこで一部始終を見ていたわけです。不正な裁判が行われたこと、イエス様が冒とく罪を犯したと決めつけられ、ひどい虐待を受けたこと。前回最後の67～68節に記されたように、顔に唾をかけられ、こぶしで殴られ、また平手で打たれたこと。わが師がこのような扱われる姿はペテロは今まで見たことがなかったでしょう。そんな状況で彼に試練が訪れます。

最初は召使いの女の一人によるものでした。彼女が近付いて来てペテロに言います。「あなたもガリラヤ人イエスと一緒にいましたね。」このことばを聞いてペテロは全身が凍り付いたような恐怖を覚えたことでしょうか。ここでイエスの弟子だと公言したら、どうなるか。自分もあそこに引っ張り出されて、唾をかけられ、こぶしで殴りつけられ、平手で打たれるに違いない。70節に「ペテロは皆の前で否定し、『何を言っているのか、私には分からない』と言った。」とあります。彼女の問いに対して彼はイエスまたはノ

一で答えることをせず、あなたの言っていることは何のことなのか、私にはさっぱり分からないとはぐらかしたのです。

それにしてもこの試練が一人の召使いの女から始まったことは大いなる皮肉です。彼は何千何万の軍隊を前にして震え上がったのではなかったのです。何の力も権威もない、名もなき少女の一言に震え上がりました。なぜこんなことになったのでしょうか。それは彼が祈って来なかったことと無関係ではないと思います。彼はイエス様がゲッセマネの園で一生懸命祈っておられた傍らで眠っていました。霊的な備えをしていませんでした。そのように祈りを通して神としっかり結ばれていないと私たちは小さな人間の声にビクビクするのは、木の葉一枚落ちる音に慌てて震え上がってしまうのです。

ペテロは入り口まで出て行きます。同じ場所にとどまるのが不安だったのでしょう。しかし行った先でまた別の召使いの女が彼を見つめます。そして周りにいる人たちに言いました。「この人はナザレ人イエスと一緒にいました。」 まだ自分に向かって言ってくればいいのに、そしてできれば小さい声で尋ねてくれればいいのに、この召使いは他の人々に向かって余計なことを言います。さてペテロは今度はどうしたでしょう。72節にペテロは誓って言ったとあります。5章の山上の説教でイエス様は「誓ってはならない」と言われました。常に真実を語っていれば誓いは不要だと言われました。しかしペテロは自分の言っていることは本当だ！と強調するために誓います。そうして実際はウソをついていた。ウソを本当だと人々に思わせるために誓った。まさに問題とされる使い方です。またペテロは「そんな人は知らない」と言います。イエス様の名前を発音せず、「そんな人は」と自分と切り離れた言い方をしました。

そうして3回目の時がやって来ます。73節に「しばらくすると」とありますが、ルカの福音書の平行記事によると、一時間ほど時間が経ったようです。ペテロとしては迫及する声が止んで安堵し始めた頃だったのでしょうか。ついに最後の試練が彼に臨みます。今度はそばで立っていた人たちがペテロに近寄って来て言います。「確かに、あなたもあの人たちの仲間だ。ことばのなまりで分かる。」 思わぬところから尻尾をつかまれてしまいます。まさかこのガリラヤ弁が災いになるとは！するとペテロは今度は「嘘ならのろわれてもよいと誓い始め、『そんな人は知らない』と言った。」と74節にあります。これはさらに強い言い方です。もしこれが嘘なら自分は呪われてもいい。神に罰されてもいい。究極的に言えば地獄に行ってもいい。そこまで彼は誓いました。その時、

すぐに鶏が鳴きます。そして彼は「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言う」と言われたイエスのことばを思い出したのです。

私たちはこの彼についての記事をどう読むべきでしょうか。もちろん私たちは彼の罪は罪として正しく責めるべきだと思います。彼は3年間に亘って主から真実に愛され、測ることなどできない恩恵を受けて来たのに、自分の都合一つで主を見捨てました。しかも一緒に死ぬようなことがあっても最後まであなたについて行きます！と約束しながら、それを破りました。さらには他の人たちを引き合いに題して、この連中がみなあなたを見捨てる弱虫であっても私だけは違います！と豪語した上で、まさにそのことをしました。これは自己中心、自己本位、自己過信のそしりを免れるものではありません。しかし私たちは他人事のようにこの記事を読んでペテロを断罪するのではなく、これを人間を映し出す鏡のような記事として読むべきであると思います。ペテロはイエス様が一番弟子として選んだ人です。この岩の上にわたしの教会を建てると言われた、その岩なる人、使徒の中の第一人者です。その彼でもこのように倒れました。彼は自分が思っているよりはるかに弱く、力のない人間でした。とするならこの私はもっとそうなのではないかと自分に当てはめて考えてみるべきではないでしょうか。私たちはともすると様々なニュースに接して、何と愚かな人たちか、何と最低のことをする人たちかと怒るかもしれません。もちろん悪は悪と言わなければなりません。しかし自分もいつでもそのような誤りに陥りやすい人間だということをいつも思う者でなければなりません。

ペテロはこの結果、外に出て行って激しく泣きました。彼は自分が認めて来なかった自分の本当の姿を見せられ、倒れて、泣くことしかできなかったのです。そして続く27章1〜2節には、夜が明けてイエス様がユダヤの会議で公に断罪され、死刑執行権を持つローマ総督のもとへ送られたことが記されます。もしこうしてイエス様が殺されて終わりだったらペテロがしたことは何と取り返しがつかないことだったでしょう。わが師を見捨てて、裏切り、その師がその後、殺されて終わりだったら、ペテロのこれ以降の人生は耐えられないものだったに違いありません。しかしそうではないことを聖書は語っています。そのことは次の記事を読んでから最後に考えたいと思います。

さて27章3節からはユダのことが記されています。3節に「そのころ、イエスを売ったユダはイエスが死刑に定められたのを知って後悔し」と出て来ます。これは一体どういうことでしょうか。「イエスが死刑に定められたのを知って」とありますが、ユダは

そうなるとは思わなかったのでしょうか。あるいは予測はしていたけれども、いざ実現してみると良心の呵責を覚えずにいられなくなったということでしょうか。詳しい彼の心理変化のプロセスは良く分かりません。しかし彼が後悔したことは事実です。しなければ良かったと思ひ始め、苦しんだことは事実です。そこで彼は祭司長たちのところへ行って、イエス様を売り渡す報酬として受け取った銀貨 30 枚を返そうとします。そしてこう言ったと 4 節にあります。「私は無実の人の血を売って罪を犯しました。」ここにイエス様の無罪性についてははっきりした証言があります。イエス様のそばでずっとイエス様を見て来た弟子の一人、しかも裏切り行為に出たユダが、この方には罪がないと証言しています。そのことを思うにつけ、その方を売り渡した自分の罪が責められたのでしょうか。そこで銀貨 30 枚を返して帳消しにしたいと願ひ出たのです。できれば元の状態に戻したいと願ひ、どうしたら良いか、祭司長たちのところへ行ってアドバイスまた導きを得ようとしたのです。

その彼に祭司長たちは答えます。4 節後半：「われわれの知ったことか。自分で始末することだ。」あなたが自分の罪に苛まされているとしても我々には関係ない。それはあなたの問題だ！と突き返します。自分で始末せよ！と言いました。これは言い換えれば、自分で責任を取れ！ということです。一つの魂が深い苦悩を覚えて助けを求めてやって来たのに、あまりに冷たい対応でした。この結果、ユダはどうしたでしょう。彼は銀貨 30 枚を神殿に投げ込んで立ち去ります。そして出て行って首を吊りました。自殺です。彼としてはこれ以外の道はなかったのだと思います。耐え切れない心の重荷をもって相談に行きましたが、自分で責任を取れ！と言われました。どうやってこの責任を取ることができるのか。彼としてはどうやっても責任を取れそうにありませんでした。そこで彼はその罪を自分の上に負ひ、いのちを投げ出すしかなかった。その彼の死が何と悲惨な死であったかは、使徒の働き 1 章 18～19 節に記されています。そこに「ユダは、・・真逆さまに落ちて、からだは真二つに裂け、はらわたがすべて飛び出してしまった」と書かれています。また 25 節に「ユダは自分の場所へ行くために離れてしまった」とも言われています。彼が行った自分の場所とは決して天国を意味しないでしょう。

最後 6～10 節にはユダが投げ入れた銀貨がどう使われたかが記されています。それは聖なる用途にはふさわしくないと祭司長たちが判断して、陶器師の畑を買い、異邦人のための墓地にしました。そしてマタイが言っていることは、こうして預言者エレミヤの

言葉が成就したということです。細かな説明は省略しますが、ポイントはこのことはすでに旧約聖書に言われていたということです。こうした小さな出来事も決してアクセントではなかった。ここにも預言は成就した。神の御手の外で起こることは一つもない。すべては神に知られていて、神の奇しいご計画と主権の御手の中にある！そのことをマタイは強調していると考えられます。

さて最後に短く振り返りたいのはペテロとユダの類似点と相違点についてです。ある意味でこの二人は似ています。まず二人ともイエス様を見捨てました。ペテロはイエス様を3回も知らないと言って見捨てました。イエス様を裏切ったとも言えます。一方のユダはまさに裏切者です。彼も主の愛を受けながら、主を見捨てました。またどちらも自分が犯した罪を思っただけで悲しみました。ペテロは愕然として激しく泣きました。自分の罪に打ちのめされました。ユダもそうでした。彼も深く悲しみ、そのことで心が刺され、何とかしなければと思いました。ところが片方は主の弟子として回復される一方、もう片方は悲惨な最期を遂げます。そしてユダは先に見たように救われたとは決して言えません。なぜこのような対照的な結果に至ったのでしょうか。

今、似た面に注目して二人を取り上げましたが、違う点もあります。実際にはかなり違っていると言えます。ペテロの罪はプレッシャーの中での一時的な脱落でした。そうするつもりはなかったが自らの弱さ故に犯した罪でした。彼はイエス様を裏切ろうとして裏切ったわけではありません。計画的にそうしたわけではありません。一方、ユダは故意にイエス様を裏切りました。十分に考える時間がある中で、自ら進んでその道を選びました。そして引き換えにお金を受け取りました。これは随分な違いと言えます。

しかし一番の違いは、罪ある自分であると悟った時、その罪をどこへ持って行ったか、ということではないでしょうか。マタイの福音書では、今日の箇所以降にペテロの名前は出て来ません。では彼はどうなったか分からないと思うかもしれませんが、次の章、最終章の16節に「十一人の弟子たちは」と出て来ます。ユダは死んで一人欠けた上で11人ですから、そこにペテロも立っていたことが分かります。彼はそのように回復されるのです。そして彼のその後のことは、この福音書が書かれた時には自明のことだったので、あえて書く必要もなかったのでしょうか。

これに対してユダはどうだったでしょう。彼はイエス様のところへ行きませんでした。

彼は祭司長たちのところへ行きました。ある人は、従って、ユダは行くところを間違えたと言っています。彼はその相談に向かった先で「自分で始末することだ」と言われました。責任は自分が取るしかない。このように考えた時、彼は耐え切れない罪の重荷を自らが負って死ぬしかなかったのです。その罪を解決することができる逃れ場に彼は行くことをしなかったのです。

この対比から改めて教えられることは、私たちには、自分の罪について「自分で始末する」のとは違う道が与えられているということです。私たちは自分の罪をどうすることもできません。自分の罪の責任を全部自分で取らなければならないとしたら、私たちにもユダのような絶望と死しかありません。しかし私たちの前にはそうではない道も与えられているのです。ここには私たちのその罪を背負ってくださる方がおられます。私たちの身代わりとして自ら十字架へと赴いてくださった方がおられます。その方のもとに行けば良いのです。この方においてこそ罪の赦しと救いがあることをこの福音書は示して来ました。1章21節：「その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」 9章2節：「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。」 12章31節では聖霊に逆らう罪以外、どんな罪でも赦されると言われました。そして26章28節の聖餐式の制定において、「これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です」と言われました。この罪を赦してくださるイエス様のもとで、私たちも罪の重荷を下ろす者とされたいのです。

ペテロはこの後、変えられて行きます。自分を誇り、自分に信頼し、自己過信する歩みでなく、主の恵みに頼り、こんな自分でも大丈夫と証しする生活へ進みます。そのために彼は主を3回も否んだこの恥ずかしいエピソードについて皆に語って聞かせたのでしょう。この情報のソースは彼だったに違いありません。彼はそのことを証しました。こんなに罪深い私でさえも、この主イエス・キリストにあっては回復できるのだ！と。私たちも望みのない自分にぶち当たるたびごとに、イエス様のもとへ行って、なおこのイエス・キリストにあっては望みがあるという人生に生かされたいと思います。どんなに自分が罪深く、汚れた人間であっても、イエス様の十字架を通して、もう一度新しくやり直すことができる人生、そして神の御心に沿って、本来のあるべき人間の状態へと造り変えられ、回復されるという救いの人生を歩む者へ導かれて行きたいと思います。